

たんべんしょうせつ
短編小説

ショッピングモールと遊園地
ゆうえんち

おため
試し版

さく
作 高橋倫子
たかはしともこ

シヨツピングモールと遊園地

高橋倫子

僕がこの世界に飛び込んだのは高校一年の夏休み。シヨッピングモールでのアルバイトがきつかけだった。子ども頃の憧れだったんだ。本物じゃないけど本物なんだ。以来、かれこれ約十年、僕は、個室の小窓から、子どもたちの笑顔を見守り続けている。いや、「子どもたち」と限定してしまうのは違うのかもしれない。子どもたちと大きなおともたち……。大きなおともたちというのもちよつとなあ。そうだ！「かつての子どもたち」なら、なんとなくしっくりくるかもしれない。僕は、個室の小窓から、子どもたちや、かつての子どもたちの笑顔を見守り続けている。

僕の主な仕事場は、シヨッピングモールや遊園地だ。そして、移動式の狭苦しい個室。本当に窮屈で仕方がない。でも、この窮屈で仕方がない個室を、子どもたちや、かつての子どもたちは、きらきらとした、憧れの眼差しで見つめてくる。そう、僕もそうだった。この個室は、憧れ以外の何物でもなかった。そして、多分今でもそうなんだ。でなけりや、こんなにきつくて不安定な仕事、とつくの昔に辞めている。

憧れるがままに飛び込んだこの世界、確かにきついけど、それでも、何事もなければ楽しい仕事だ。辞めたなんて一度も思ったことはない。いや、一度はあったかな？ 初めて辞めたいと思ったのは、この仕事に慣れ始めたはずの、高校二年の夏休みだった。僕は暑さと息苦しさに耐えきれず、個室の中でぶつ倒れた。中途半端な慣れは危険だ。危うく命を落とすところだった。

気が付くと、僕は個室を引つ剥がされ、仮テントの救護室のビニールシートの上にな横になつていた。両脇と両太腿の付け根に氷のうがセツトされていて、延長コードを引いた扇風機が心地良く回っている。少々生温さを感じたが、それでも心地良かった。僕の意識が戻つたことに気付いたスタッフが、できるだけ音を立てないよう周りに気を遣い、忍び足で駆け寄つてくる。そして、ペットボトルのスポーツドリンクを手渡してくれながら小声で教えてくれた。

「堀内君。気が付いて良かった。多分、熱中症だね。今日は特に暑いからねえ。あ、ガラゴロスは銀葉神局司法セクターに送られたことになってるから、ゆっくりしてて大丈夫だよ。飲み物、足りなかつたらクーラーボックスの、好きに飲んでいいから」

そうなんだ。僕の仕事はスーツアクター。さつきまで「個室」と言つていたのは着ぐるみやヒーロースーツのこと。ショッピングモールや遊園地を中心にシヨをやってる。ガラゴロスは僕が最初にもらつた仕事。銀葉神使というヒーローシリーズに出てくる葉依獸(怪獸)役。怪獸の個室の壁は、ヒーローものよりも分厚くて辛い。夏場は特に。

僕はあの時、ぶつ倒れていく自分を感ぜながら思つたんだ。

——あー、僕、ヒーローになれないまま死んじゃうのか。

ヒーロー。いつになったら勝ち取れるかわからない、ずっと演じることはないかもしれないそんな役のために、僕はこの仕事に命を張ることができるとか？ 嫌だ！ こんな仕事、とつとと辞めてやる！

念願のヒーロー役を勝ち取ったのは、高校三年の夏休みだった。そう。辞めなかったんだ。本当なら、受験勉強に打ち込むために、このアルバイトは辞めているはずだった。でも、もう、僕は辞められなくなっていたんだ。やつと念願のヒーロー役を演じることができた。ここで辞められるわけがない。両親を説得するのは大変だったよ。だけど、週末だけの約束で、どうにか許してもらえたんだ。もつとも、この手の仕事は、もともと週末だけにしか無かったりするのだが。もちろん受験勉強も必死で頑張ったさ。とある計画のためにね。

僕があの子を初めて意識したのは、そんなある日のことだった。

ショッピングモールでのショーのあとの撮影会で、あの子は僕のマスクをじつと覗き込んできたんだ。見た感じ、小学校高学年から中学生ぐらいの年頃かな。長いくせつ毛と、くりつとした不思議な一重が印象的な女の子だった。で、母親らしき人にこう言ってるのが聞こえた。

「今日の銀葉神使ルセット、いつもの人じゃないみたい」
すると、あの子の母親らしき人もこう言ったんだ。

「そうやねえ。今日の人は若いお兄ちゃんみたいやねえ」

———そうか。あの子、いつもは先輩がやってる銀葉神使ルセットを覗てるのか。って、え？ マスクかぶっててもいつもの人じゃないって分かっちゃうんだ。あの子のお母さんも、ベテランが入ってるか若いのが入ってるかまで分かっちゃうんだ。怖っ。お客さん怖っ。

僕の顔は、造形美溢れるマスクの下で、茹でダコのように真っ赤だった。茹でダコのように真っ赤なを感じながら、次の撮影希望者と並んでポーズをキメる。職場が、顔はなんとでもごまかしの効く、狭苦しい移動式個室の中で良かったと思う瞬間。

子どもたちや親子連れの撮影希望者の列が途切れると、僕は、お高そうなごっついカメラを抱えた、かつての子どもたちに囲まれる。様々なポーズの注文が飛び交い、僕は先輩の偉大さを痛感する。先輩は毎回、この圧迫感と重圧感の中で、いとも簡単そうに、照れや恥ずかしさの一切を捨てきってポーズをキメているのか。ああ、そうだな、しばらくの間、銀葉神使のヒーローショー関連のSNSを見るのはよしておこう。先輩ルセットとの比較記事を目にしてしまったら、せっかくヒーロー役を勝ち取って、それなりにやる気になっている僕のテンションは、だだ下がりがりだ。

ステージから視線を上げると、さっきのあの子が上の階からこちらを覗いているのが見えた。あの子もそんな僕に気付いたようだ。

——先輩なら？ 先輩ならこんな時どうする？

僕は、あの子に向かって手を振った。その間も、かつての子どものたちのシャッター音は鳴り続ける。

晴れて大学生になった僕は、必要にかられ、地元を離れ上京した。いや、正直に白状すると反対だ。上京したくて東京の大学を受けた。これが、アルバイトを続けながらも受験勉強を必死にやっていた、とある計画の全貌だ。もちろん地元でやっていた銀葉神使ルセットも偽物ではない。あれはあれで本物だ。だけど、より本物に近い場所に行きたかった。地元でアルバイトしていた頃の先輩の紹介で、東京でもヒーローショー関係のアルバイトにありついた。やっぱり、やりたいことは公言しておいた方がいい。縁があれば、救いの手が差し伸べられる。更によりありがたいことに、その先輩の口利きで、僕は上京先でも銀葉神使ルセット役をやらせてもらえることになった。おお、偉大なる先輩ルセット。僕の最初の先輩が、あなたで本当に良かった。

大学二年の冬、遊園地でのショーの最中、僕は個室の小窓から、ある人物を一生懸命に確認していた。見覚えのある女子中高生。いや、見覚えのある女子小中学生が女子中高生になった感じの……。あの特徴のある長いくせつ毛を、あのくりつとした不思議な一重を、僕は忘れてはいなかった。家族で遊びに来ている様子だった。

アクションをこなしながら、僕の目は、観客席の向こう側のあの子を追う。

僕は不意に宙を舞った。

ガラゴロスに足を引っかけられた。予定外のキックも飛んできた。ガラゴロスの短い足で素早いキックをキメてくるなんて、なんて技術なんだ。

観客席に、驚きと悲鳴が入り乱れたような緊張感を感じた。

その日、ガラゴロスに入っていたのはショーのリーダーだった。注意散漫だったことをめちやめちや叱られた。

ショーのあと、もやもやした気持ちでぼんやりと控室を出た。二回目のショーまでは一時間ほどある。少し一人になりたかった。

遊園地の中の、教台の自販機が並ぶ無料休憩室。あの子と目が合った。ただの偶然だ。だが、一瞬びくつとしてしまった。バレたか？ バレているのか？ いや、大丈夫だ。ヒーロースーツをまとっていない僕はただの大学生。あの子から見れば、ただのおじさんだ。人混みにまぎれ、あの子とはこれっきり。仮に僕が個室の小窓からあの子を見付けることがあっても、あの子はそれが僕だとは気付かない。気にしない、気にしない。

の、はずだったのだが、二回目のショーで、僕は早くもあの子を見付けてしまった。気になってしまおうではないか。今度は観客席の向こう側ではなく、観客席の中に。なぜだか分からないが気になる。気になる。あー！

気になり過ぎる。しかしさつきと同じ失敗はできない。

——しつかりしろ！ 僕！

ガラゴロスが台本にはない助走をつけてこちらにやってくる。

——早っ！ リーダー、僕の気の散りように、もう気付いたのか？

僕の頭の中は、ガラゴロスからの攻撃をいかに自然にかわすかということで一杯になった。

このリーダーは何かにつけて突如アドリブをぶっ込んでくるので厄介だ。アクションでアドリブなんて危険極まりないんだから、本当、止めて欲しいよ。僕の注意散漫よりもよっぽど危険じゃないか。止めて欲しいんだけど、さすがに僕の立場ではそれは言えないな。このリーダーは、突如アドリブをぶっ込んでくること以外、心体の三拍子そろった素敵な人だ。僕はその足元にも及ばない。だが、地元のアルバイト先の先輩は台本に忠実な人だった。アクションをやる人間は、本来ああでないといけないんだ。最初に教わった人があの先輩で、本当に良かったよ。

僕は、迫り来るガラゴロスを「がしっ」と受け止め投げ飛ばす。

僕だつてこのぐらいのアドリブには対応できると知らしめるんだ。

シヨーのあと、撮影会でポーズをキメながら、列に並ぶあの子を探した。窮屈な個室の中で、マスクだけは

カメラの方を向けながら、目は思いっきりの挙動不審だ。だが、なかなか見付からないので諦めて撮影会に集中することにした。集中しようと、しようとした時、僕のマスクを覗き込む人がいた。

—あの子だ！ いつの間に？

時間が止まる。窮屈な個室の中で、自分の息遣いと心臓の音だけがやけに大きく聞こえる。

あの子からのポーズの要望はない。ただ僕の隣に立って、母親のカメラに笑顔を向ける。あの子の母親のシヤッターに合わせ、一通りのお決まりポーズをキメる。

何かを意識しているわけじゃない。だけど、何も意識していないわけでもない。

「あと五秒でーす！」

司会のお姉さんの声が聞こえる。時間がない。今しか。時間が……。

僕は、あの子の肩に手を置いた。ふんわりした感触。

—しまった！

別にしまったことではなかったのだが、そう思った。が、次の瞬間、とっ散らかった僕の心がすーっと収まっていくのを感じた。あの子を挟んで反対側に立っていた銀葉神使アロゼ役の野村さんが、僕のポーズに合わせ、あの子のもう一方の肩に手を置いてくれていた。

—ナイスフォロー、野村さん。ありがとう。

「いまおも、今思えば、そんなことを思ったのは、あの時、僕に何らかの下心があつたからだ。」

「そうだ。ご存知ない方に説明しておく。銀葉神使アロゼとは、僕が演じている銀葉神使ルセツトの相手役ヒロインだ。野村さんはそのアロゼを演じている。野村さんは、この仕事をするには少し小柄で線が細い。ヒーロースーツをまとうと、羨ましいほどの曲線美だ。うっかりしていると見とれてしまう。そしてその素顔は、今風のイケメン。そう。野村さんは男性だ。確か、僕より三つ四つ年上だったかな。小柄な背格好を活かしたヒロインおじさんだ。いやはや、曲線美ヒロインへの夢を奪って申し訳ない。このことはここだけの話にしておこう。」

「仕事終わりに、野村さんが乙女チックな声色で話しかけてきた。」

「堀内ちやあん。今日の二回目、いい感じだったじゃん。あんなにカッコ良くされたら、ますますサポートしたくなっちゃうわん」

「僕は背筋をぞくつとさせながら、おっと失礼、決してそんなことは思わずに、」

「ありがとうございます！」

と爽やかに、あくまで爽やかに返した。

野村さんの名譽のためにお伝えしておく。普段の野村さんは、ごく一般的な男性だ。決してそっちの方面の人ではない。

大学卒業後、僕は地元には戻らず、それまでアルバイトとして勤めていたキャラクターイベント会社の正社員になった。本当のことを言えば、その先に進んでもみなかった。つまり、シヨッピングモールや遊園地などでの仕事だけではなく、テレビや映画に出演する、いわゆるザ・本物にも挑戦してみたかった。でも、万が一しかなかった、これまで積み上げてきたものを失ってしまうのは嫌だった。これは格好をつけた言い訳で、単なる臆病だったのかもしれない。でも、僕の居場所は、子どもたちの生の笑顔に触られるこの場所なんだ。この場所を大切にしたいと思った。

正社員になったとは言っても、やることはアルバイトの頃と大して変わらない。主な仕事はもちろんスーツアクターだ。違うのは、まとうものがヒーロースーツや怪獣の着ぐるみだけではなくなったことだ。ああ、体力の続く限り、僕は何にでも変身してやるさ。ある時は妖怪さんに、またある時はウサギさんやクマさんに、そしてある時は女の子向けアニメのヒロインに変身だ。想像するな。しないでくれ。こういうものは、現実ではないものが現実のように見えるから楽しいんだ。無理に現実を知る必要はない。できる限り現実を見せないことが、僕らの仕事だ。

あとは、現場仕事のない平日に、事務仕事や雑務なんかの仕事も任せてもらえるようになった。それから、自分の稽古とは別に、後輩たちに教えるためのアクションや殺陣の稽古なんかもやっている。自分ができていること

でも、人に教えるのって意外と難しいんだ。身体って、一人ひとり違うものだからね。

この世界の人間の入れ替わりは激しい。僕が勤めているキヤラクタイイベント会社のアクター部でも、リーダーと野村さん以外のメンバーはしょっちゅう入れ替わっている。新しく入ってくる後輩たちに、教えても教えるもきりが無い。お試しのように、ちよろつとだけやってはいなくなっていく。まあいいんだ。この世界の仕事は不安定で将来が見え辛い。僕はたまたま、運と縁と根性でこの世界にしがみついているけれど、安定を求めるところに、ずっと欲しいとは言えない。それに、この世の中には、人生の時間の割に合わないほどに多くの、やってみなければわからないことが待っている。試してみても、自分には合わないとかあったら、さっさと次に挑戦するのも正解だろう。というわけで、次から次へと入れ替わる後輩への指導が忙しい。だが、自分の上に昔っから知ってる先輩がずっといてくれるというのにはありがたい。ちなみに、今のキヤラクタイイベント会社のアクター部には、リーダーと野村さんより上の先輩はいない。気が付くと僕は、この部の中堅になっていた。リーダーと野村さんと僕の間には、いつしか暗黙の役割分担ができていた。リーダーは熱血担当、野村さんはムードメーカー、僕は……そうだな、縁の下担当でも思われていたら嬉しいな。まさに特撮ヒーローのようなチームワークだ。

そうだ。特撮ヒーローで思い出したことがある。ショッピングモールや遊園地は、僕にとっては秘密の基地だ。

子どもの頃にテレビで観た特撮ヒーローの中に、遊園地の地下が秘密基地になっているという設定のものがあつた。子どもの頃にテレビで観たものはテレビの中でのことでしかなかつたけれど、今僕は現実に、シヨッピングモールや遊園地の中の、控室と言う名の秘密基地を拠点に、ステージへと出動している。あ、だけど、僕らの秘密基地には、テレビで観ていたものとは違うことが一つある。僕らの秘密基地には敵も味方もない。怪獣もヒーローも、みんな大切な仲間だ。皆が怪我無く、一つ一つのシヨを安全に作り上げていく。その上でお客様に楽しんでいただく。

社会人四年目の初夏のことだつた。シヨッピングモールのシヨで一回目の銀葉神使ルセットを演じたあとの握手会。僕の手を握りながら、僕に話し掛けてくる人がいた。

「このヒーロー、まだやってるんですね。握手できて嬉しいです」

若い女性の声だつた。僕は窮屈で薄暗い個室の小窓から、その声の主を確かめた。長いくせつ毛に、くりつとした不思議な一重。

——あの子だ。姿は大人になっているけれど、確かにあの子だ。

ほんの十秒ほどの再会。

前回あの子に会つた遊園地のことを思い出していた。あの時のように、二回目のシヨにも来てくれないか

と。そんな想いを、握手にも込めたんだ。

二回目のショーに、あの子はいなかった。

仕事終わり、僕は控室に荷物を残したまま、世を忍ぶ飯の姿、おっと、つまりヒーロースーツをまとっていない、一般の人間の姿でショッピングモールの中をうろろろしていた。吹き抜けの二階から、さっきまでステージが設けられていた一階の広場を見下ろす。さっきまでステージが設けられていたあの場所から、あの子が見上げている。そして……。

——手を……振ってる？ 僕に？ まさか。いや……。

僕は半信半疑で手を振り返してみた。すると、あの子はさっきまでよりも強く手を振った。

ただそれだけのことだ。あの子にはそれきり会っていない。僕の思い違いだ。そんなもんだ。僕らがステージ以外の場所でお客様に注目されることなど皆無に等しい。そして、そのことさえも心のどこかで楽しんでいる。はずだった。はずだったのだが……。

荷物を取りに戻った控室のドアの前にあの子がいた。あの子は少し背を丸め、僕を見上げながら、不安そうに小さく言った。

「……堀内さん……ですよね？」

「はい」

僕(ぼく)はできるだけ冷静(れいせい)にそう答(こた)えたが、心(こころ)の中では何か(なに)がぐるぐると、激(げき)しく渦(うず)を巻(ま)いていた。あの子(こ)は急に(きゅう)にたどたどしい早口(はやぐち)になって、僕(ぼく)に一気に(いき)にこう言(い)った。

「十四年(じゅうよねん)振り(ぶり)なんです。狭山(きやま)です。あ、六年(ろくねん)振り(ぶり)ぐらいかな？ 狭山(きやま)めばえです。手(て)、変(か)わってないですね。こちの大学(だいがく)に來(き)たんです。あの、小学(しょうがく)校(こう)の遠足(えんそく)。あ、遊園地(ゆうえんち)の時(とき)のつて言(い)った方(ほう)が分(わ)かるのかな？」

——え？ えっ？ えーっ？ えーっと、何(なに)？ 僕(ぼく)、どうすればいいの？

僕(ぼく)はとっさにどう言(ことば)葉(かえ)を返(かえ)していいか分(わ)かからず、取(と)り敢(あ)えず愛想(あいせ)笑(わら)いを浮(う)かべながら、控室(ひかえしつ)の鍵(かぎ)をできるだけゆっくり開(あ)けながら時(じ)間(かん)稼(かせ)ぎをし、シヨ(シヨ)ーでの前(まへ)転(てん)後(ご)転(てん)、側(そで)転(てん)、バク宙(ちくちゆう)よりもかなりの高(たか)速(そく)で頭(あたま)を回(か)えさせた。そして、出(で)た答(こた)えはこうだ。

不審(ふしん)つちや不審(ふしん)だけど、不審(ふしん)な感(かん)じではないので、取(と)り敢(あ)えず控室(ひかえしつ)に入(はい)ってもらおう。部外者(ぶがいしや)つちや部外者(ぶがいしや)だけど、僕(ぼく)の中(なか)では何年(なんねん)も前(まへ)から関(かん)係(けい)者(しや)だ。そう。関(かん)係(けい)者(しや)だ。控室(ひかえしつ)に入(はい)ってもらおう。

大抵(たいてい)の場合(ばあい)、僕(ぼく)らのようなヒーローにこのような一般(いっぱん)のお客(きやく)様(さま)が訪(たず)ねてくることはない。僕(ぼく)らが一般(いっぱん)のお客(きやく)様(さま)とふれあえるのは、シヨ(シヨ)ーや撮影(さつえい)会(かい)、握手(あくしゆかい)会(かい)のみだ。仕事(しごと)の特性(とくせい)上(じょう)、マスクの下(した)でお客(きやく)様(さま)の生(なま)の声(こゑ)を耳(みみ)にすることはあっても、僕(ぼく)らがその場(ば)で直(ち)接(せき)お客(きやく)様(さま)に声(こゑ)を発(は)つすることはない。次(つぎ)に必(かなら)ず同(おな)じ役(やく)を演(えん)じていると

も限らないし、同じ場所おなじばしょで演じるとも限らない。ヒーローとして「また必ずかおおう」なんてセリフが流れることはあっても、一個人いちごじんとして必ずはない。現実げんじつであって現実ではない時間を売る商売だ。

だが、あの子は僕の現実に登場してきた。そのことで、僕が静かに積み上げてきた、世を忍んできた、あの子への、何か特別なものだった想いが、一気にきれいに崩れ去った。あの子に、「そこは壊しちゃだめなところなんだよ」と、言ってしまうような僕もいた。

役と現実の境界線はどこにあるのだろうか。僕は、僕の現実に登場してきてしまったあの子こを、このまま受け入れてしまっても大丈夫なのだろうか。賛否両論あるだろう。僕も最初はあり得ないと思ひ驚いた。驚いたが、悪い気はしなかった。悪いふうには受け取りたくなかったんだ。

僕は控室のドアをそーっと開けて、恐る恐る誰もいないことを確認し、彼女を中に招き入れた。控室のそれほどきれいでないテーブルに、さつきまで野郎どもがカップラーメンを食らった、ポットに残っていたお湯でお茶を用意した。とっさに目に入ったのが、多分使っているんだよなって感じの新しい紙コップと、緑茶のティーパックだったからだ。一瞬思ったんだ。このくそ暑い日に温かいお茶かよって。だけど、冷たい飲み物を用意するような余裕はなかったんだ。あの時の僕のは。

彼女は色々話してくれて、僕も色々質問したが、具体的に何をどの順番でどう話したのかは覚えていない。

が、大体の話は次のようなことだった。

彼女と僕は地元かのじよの小学校しょうがっこうの同窓生どうそうせいだった。僕が六年生の時に彼女は一年生だったらしい。入学前にゅうがくまえの一日体験いちにちたいけんの日ひにも、入学後初めてにゅうがくごこぼの遠足えんそくの時ときも、僕は彼女のお世話係せわがかりだったらしい。遠足えんそくの時とき、坂道さかみちで転んで泣いてしまった彼女かのじよ。僕は励ましはげしながら、彼女の手を引ひいて歩いたらしい。そんな、本人ほんにんの僕がすっかり忘れてしまっているようなちっぽけなお兄ちゃん振りを、彼女はヒーローきゆうせんぼに助けられでもしたかのようにずっとずっと覚えていてくれて、ある日ひ、本物のヒーローショーほんものヒーローショーで偶然僕を見つけたのだと言う。僕のアクションしよくは、特に、初期しよきの頃のつたないアクションおこなは、幼い日の彼女の記憶きおくの中なかにある、お兄ちゃんヒーローのままだったらしい。そして、確信かくしんを持ったのは遊園地ゆうえんちの無料休憩室むりようきゆうけいしつだ。マスクをかぶっていない僕の顔かおを見て、小学生しょうがくせいの頃の僕の面影おもかげに、しっかり重かさなつたのだという。

僕ぼくの方も、言いわれてみれば、「めばえ」という名前なまえにほんやりと聞き覚えおぼがあるような気がする。僕ぼくのことは見上げていた、まだ幼おとこかった彼女かのじよの長ながいくせつ毛けと、くりつとした不思議ふしぎな一重ひとえに、見覚えみおぼがあったような気がする。彼女のことが気きになって仕方しかたなかったのは、そういうことだったんだね。

そうだ。あの日の控室ひかえしつで、彼女と最後に話はなしたことは今いまでもよく覚えてる。

僕はこんな質問をしたんだ。

「だけど、何年も経って、顔も姿も、背格好だって変わってるのに、どうして僕だって分かったの？」

すると彼女は、改めて僕の頭の中から足の先までに視線をゆつくりと動かして、何かに納得したように、静かににっこり笑って、こんなことを言っていたんだ。

「スーツまでってマスクかぶってる方がよく分かるんですよ。見かけに惑わされないから。堀内さん、大人になってもあの頃と同じです。手の握り方も」

ヒーロースーツ越しの握手なら、誰とでも、いくらでも平気なのに、素の僕が彼女と手を繋ぐまでには随分時間がかかったんだ。そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、彼女は僕が演じるヒーローの握手会のスケジュールをチェックしては、毎回のように参加してくれたんだ。一般のお客様と同じように、空調の整ったシヨッピングモールでのものはもちろんのこと、真夏の炎天下でも、真冬の北風の中でも、長い長い行列に並んでね。

僕たちは、それから三年付き合って、家族という名のチームになった。

そうそう、野村さんにはやきもちを焼かれたよ。

「堀内ちゃん。私がいるのに何よ、もう」
おとめ
乙女チックな声色で。もちろん冗談でね。

ショッピングモールと遊園地。そこは僕らの秘密基地なんだ。

(短編小説『ショッピングモールと遊園地』お試し版 おわり)

(初公開日 二〇一九年三月二十七日)

この度は『シヨッピングモールと遊園地』を

最後までお楽しみいただきありがとうございます。

ここまで読み進めてくださったあなたはもう、堀内くんの世界観のファンになっているはず。

その後の堀内くんが気になっているはず。

安心してください。

堀内くんのお話には続きがあります。

続編を執筆後、このお話と同載で、紙の本を出版予定です。

どうぞお楽しみに！

作者 高橋倫子